

▼記事タイトル

勝ち組OLが突如リストラ！ なぜか田舎を旅巡りすることになった



▼リード文

梨花は田舎のあぜ道をトボトボと歩いていた。

ジミーチュウのピンヒールが柔らかい土に埋まり、都会の道のような速度で歩けない。

いや。

ヒールどうこうというより、梨花はつい5分前に電話口で聞いた上司の一言に衝撃を受けて、トボトボとしか歩けなくなっていたのだ。

「君、明日の企画会議は出なくていいから。

あ、何だったらそっちを数日間ほど旅して羽を休めたら？有給休暇は腐るほど余ってるだろ。」

▼構成

<h2>リストラ宣言は突然に</h2>

ここは三重県の伊勢志摩地方だ。

梨花の住む東京から、新幹線で名古屋に出て、そこから近鉄の在来線など乗り継いで辿り着いた。

片道4時間ほどかけて掴んだものは、とあるスポーツ選手のスクープ。
その選手が隠れている実家にアポなしで乗り込み、貴重な本人の証言を得たのだ。

梨花は大手雑誌社の編集記者をしている。
新卒で入社し15年、ずっと週刊情報誌の畑を歩んできた。
アラフォーを迎えるにあたり「次期編集長か？」と周囲に囁かれるほど、順調に成果を上げてきたつもりだ。

今回のスクープは、梨花の出世の大きな後押しになるはずだ。
そう思い、業務委託のライターに任せず自分で裏取りするためにこの田舎町に出向いた。

「編集長！本人の証言取れました。これ、明日の企画会議に持ち込みます。」と、鼻息荒く会社に電話をかけたのが5分前だ。

そこで、先ほどの上司である編集長の衝撃の返答だ。

音声データなどは既にオフィスに送ってある。ということは、スクープのネタそのものの問題ではなく私の問題ってワケだ。

「これっていわゆる、左遷とかリストラってやつ～！？」と声を張り上げてみるものの、広大な田んぼの風景からは、カラスの鳴き声しか返答がなかった。

<h2>私のことを知らない街</h2>

明日の会議のために、また4時間かけて東京にとんぼ返りをしようと思っていた。

しかしその必要はなさそうだ。
編集長は、来月から梨花は児童書の部署に異動になることをほのめかしていた。

呆然としながら梨花は地元のバスに揺られて、「賢島」駅に戻った。

「そうか～、聞いたことがあると思ったらサミットをやった街か。そのわりには何にもないところだな。」と梨花は独り言ちた。

梨花にとって、これまで訪れた遠方の街はほとんどが仕事目的だ。
そこがどんな街でどんな観光名所があるかは全く知らない。

「全く知らない街だな」と梨花は途方に暮れた。

東京に戻る気になれなかったので、駅前のさびれた旅行案内所で今日泊まれる宿を探した。
有名なホテルは既に予約が一杯だったため、唯一予約ができる海沿いにある旅館を予約した。
「真珠荘」という旅館名を見て、「出来の悪い浪人生が住んでるアパート名みたいだな」とぼんやりと思った。

日帰りと思っていたため、梨花には着替えも化粧品も持っていない。薄いブリーフケースにはパソコンと必要書類のみが入っていた。

とりあえず地元のスーパーに足を踏み入れる。

化粧品は普段使っている海外ブランド製品はもちろんない。
陳列された洋服は、部屋着に毛が生えたようなカジュアルなものばかりだ。トレーナーを手にとると、オシャレに見せようとしているのか、謎の英単語とクマちゃんのイラストがどーんとプリントされている。

今着ているポールスチュアートの空グレーのタイトスカートスーツとはえらい違いだ。

諦めてトレーナーを手に取りレジに向かう梨花。
なにやら自嘲気味な笑みがこぼれ、こう呟いた。

「そうか、この街も私を知らないんだ。何を着たっていいか。」

<h2>うっかり海に癒される</h2>

スーパーの買い物袋を持ちながら、夕暮れのなか真珠荘に向かった。

「老舗」と言えば聞こえはいいが、要は古びた旅館だった。
しかし2階建てのコンパクトな佇まいは、今の梨花の塞いだ気分には妙にしっくりと来た。玄関前の石畳も古いながらも手入れが行き届いていて、なかなか感じが良い。

梨花は8畳ほどの和室に通された。
窓を開けると仄かな磯の香りとともに、静かな波の音が聴こえた。

そういえば梨花は仕事で寝不足やストレスが溜まると、デスクのイヤホンで波の音や木々の自然音を聴くようにしていた。超音波の一種「1/fのゆらぎ」にヒーリング効果があると聞きかじったからだ。

「そっか。リアルで波の音を聴きに来ればいいだけだったんだ」と、夜風を頬に受けながら梨花は思った。

とりあえず歩き疲れたので、風呂に入ることにした。
旅館に一つしかない風呂は大きくはないものの、ナトリウム系の温泉だった。
筋肉痛や打ち身に効能があるそうで、入ってみるとヌルっとした良い泉質だった。

客は梨花一人しかいなかったため、大きな窓を全開にしてみた。
ここでも波の音が聴こえ、露天風呂のような風情だ。
梨花はヒールで疲れたふくらはぎをさすりながら、こんなにゆっくりと湯船に浸かったのは数年ぶりということを思い出した。

風呂でさっぱりしたあとは、例の「クマちゃんトレーナー」を着た。
メイクを落とした自分の顔を鏡で見ると、頬はカサついていて、目の下にはひどい隈がある。
「クマ女がクマちゃんかよ！」と梨花はやけくそでおやじギャクを繰り出す。
そのセリフはロンリーに風呂場にこだましたが、不思議と気分はサッパリしていた。

<h2>謎のお告げが.....</h2>

部屋に戻ると夕食の支度が整っていた。

なんせクマちゃんトレーナーなので、部屋食なのはありがたい。
しかも旅館の見た目からは想像できないほど、豊かな海産物の皿が数々と並んでいた。

梨花は地元の日本酒を頼むと、伊勢志摩サミットでも吞まれた「作(ざく)」という日本酒が運ばれてきた。

温泉後の火照った体に、冷えた辛口の日本酒をキュッと運んだ。
五臓六腑に染み渡る。
今日は午前の新幹線でサンドイッチを食べただけだったと思い出し、急に空腹を覚えた。

お造りの帆立を口に運ぶと、ねっとりとした甘みがあり、日本酒との相性は抜群だ。鮪、かんぱちなど、どのお刺身も海が近いせいか、明らかに鮮度が高い。
鮑の旨煮には隠し味で肝が使われているのか、コリコリとした食感に肝ソースが深みを添えている。
「た、タマラン！」と雄叫びを上げ、梨花は追加の日本酒とともに、次々と料理をたいらげていった。

満腹になり、梨花は吐息とともにごろりと床に寝そべった。

知らない街だからこそ、目にするものや食べるものは全て新鮮なサプライズに映る。
知らない街だからこそ、スーツを脱ぎ捨ててクマちゃんトレーナーでごろりとできる。

知らない街だからこそ、私が日常と思っていたものが客観的に眺められる.....。

そこにガラッと障子を開けて、「お食事はいかがでしたか？」と割烹着姿の女将が入って来た。
繊細な料理を出すだけあって、こざれいな熟女だった。

「いや～、まさかこんな所でこのクオリティの美味しいものがいただけるとは。」と馬鹿正直に答える梨花を見て、女将はクワっと目を見開いた。

鬼のような形相で、梨花のおでこの辺りから背後を睨みつけている。

「あ、貴女！何という禍々しいものを背負ってはるの！」

女将は私を指差して、ワナワナと言いつつ放ったのだ。

>>next: 女将の予言とは...？